



祐介の目

大田ゆうすけ

(福山市議会議員)

No.21

毎月1日号に掲載

ばら祭を考える

5月11日、福山市戦没者追悼式が開催された。毎年ほぼ同じ宗教色を排した形式的な内容であり、追悼の言葉の後に参列者が献花を行い、小一時間で終了する。参列者は高齢化し減少する一方だ。

聞くとところによれば、戦前は緑町にあった四一連隊の兵営において「備後招魂祭」という慰霊祭が開催されていた。護国の英霊をまつる大祭壇は、周囲に幟や色とりどりの吹流しを配し、数々の供え物で飾っており、初日は神式、二日目は仏式で祭典が行われた。また、広場には競馬場が作られ、他にも数々の興行(オートレース・相撲等)があり、老いも若きも一つ心で参拝した備後全体の大祭典であったそうだ。国の為に命を捧げた人達への感謝の祭だったのだ。

ところで、毎年5月の「ばら祭」の開催目的は何であろうか？福山市は「百万本のばら

まちづくり」を進めているが、ばらのまちとしての「重み」が足りない気がしてならない。ご承知のように、ばら公園は昭和32年に空襲の焼け跡に1000本のバラを植えたことが始まりで、戦後復興のシンボル、平和の象徴として位置づけられている。しかし、市民があつた犠牲者や緑町公園にあつた四一連隊の兵士達に思いを馳せて祭りに参加しているだろうか？単なるお祭り騒ぎに終わらせてはならない。

私は、ばら会小林名誉会長の戦争体験をお聞きしたことがある。満州にて50kgの爆雷を抱えてソ連軍戦車の下に飛び込む決死隊になり、その後モシベリアに抑留され、地獄の苦しみ味わったそうだ。そのような体験を経て、ばら公園の創設に関わられたが、我々とは比較にならない程の平和に対する思いがあつた。我々はそのような戦争の歴史を継承することなく、「平和」という観念的な思いを唱えるだけになったので、ばらのまちづくりの「重み」が増してこないと私は感じている。そこで提案するが、戦没者追悼式とばら祭を合体させ「招魂ばら祭」とし、戦争とばらに関するミュージアム等も整備してはどうだろうか。